梶原先足軽共を遣して生田の森の逆茂木を
取除させ五百余騎喚て蒐けれハ次男平
次景高余り先へ進む間父の平三
使者を立て後陣の勢の続かざるに先かけ
たらむ者は勧賞有まじき由大将軍
よとの仰で候と云送りければ平次暫ひかへて

武士の取伝へたる梓弓引ては人の返すものかハ
と申せとて喚いてかく梶原これを見
て平次討すな者とも景高討すな続けやとて
父の平三兄の源太同三郎続いたり梶原
五百余騎城の中へ蒐入てさんざんに
蜘蛛手十文字に蒐破て颯と引てぞ出ければ

嫡子の源太ハ見えざりけり梶原郎等共に源
太ハいかにと問ければ深入して討れさせ
給て候ならんと申せバ梶原申けるハ
梶原聞もあへず世にあらんと思も
子共が為源太討せて景時命生ても
何にかはせんされバ返せやとて又取て返す

其後梶原鐙踏張立上り大音声上て昔ハ
八幡殿の後三年の御戦に出羽の国仙北金沢
の城攻させ給ひし時生年十六歳で先懸て
左の眼を甲の鉢付の板に射付られ
ながら其矢抜て答の矢射て其
敵が首取て名を後代に挙たりし鎌倉の権

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

五郎景正ゟ末葉梶原平三景時にて一人當
千の兵ぞや城の内ゟ我と思ハ今人々ハ哥
舎や見參せんとて喚て蒐城の内ゟ出
ぬて出今名ゟ東國ゟ聞人ゟ兵ぞや
餘ゟ漏らせ討ぬと梶原を中ゟ取籠
て我討ぬとも我ゟ進ゟる梶原我身の上をバ

知すして源太ハ何ゟにもやらず蒐破蒐廻り
勝ゟ極ハ紫の如く源太ハ馬をも射せ歩立ゟ
なる甲をも打落され大童ゟ成て二丈計有
ゟる岸を後ハ當て郎等二人左右ゟ立敵五人
が中ゟ取籠されて面をも始らず命も惜ます
皆我最後ゟ素戰ゟ梶原一人ゟ見て源太ハ

来討ハ此里ニ姫ヲ思ヒ。忠義馬ヲ我ニ下。
ヤ為ル源太景時ヲ在同リ死ヲ去敵ヲ
後ニ此ヲ見テ云ヒ。父ヲ為ニ五人ノ敵ヲ二人討
捕ニ二人ヲ負ヒテ弓矢取ル。蒐ヲ引ル。
折ルニ我ニ誘ヲ源太ニ。掻具シテ我ニ出
ル里ヲ梶原ガ二度ノ蒐ニ是也

口説

坂落

是ヲ始テ三浦鎌倉秩父足利野
井與横山黨ニハ猪俣兒玉西黨
鍬喜黨私黨ノ兵共総シテ源平乱
合入替々々関ヲ咄ト作ケル。喚キ叫
声山ヲ響シ馳遠フル馬ノ音ハ雷ノ

如ク射遠フル矢ハ雨ノ降ニ異ナラズ或
ハ薄手負テ戰フ者モ有リ或ハ手負
肩ニ引掛テ後ロヘ引退ク者モ有リ
或ハ引組差遠ヘテ死ヌルモアリ或ハ
取テ押エテ首ヲ掻モアリ掻ルルモ有
何レ隙アリ𪜈見ザリケリ斯リシカ𪜈

大手計ニテハ如何ニモ叶フヘキ共見エザ
リシニ六日ノ夜ノ曙ニ大將軍九郎御
曹司義經其勢三千余騎ニテ鴨
越ニ赤上テ人馬ノ息休メテ坐ケルガ
其勢ニヤ驚キタリケン男鹿二ツ妻鹿
一ツ平家ノ城郭一ノ谷ヘゾ落タリケ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

ル平家ノ方ノ兵ヒコレヲ見テ里近カラ
シ鹿ダニモ我等ニ恐レテ山深フコソ入
ベキニ只今ノ鹿ノ落様コソ怪ケレ如何
様ニモ是ハ上ノ山ヨリ敵落スニコソト
テ大ニ噪所ニ爰ニ伊豫ノ国ノ住人武
智ノ武者所清教進出テ縦ヒ何者

ニテモ有ラハアレ敵ノ方ヨリ出来ランス
ル者ヲ左右ナウ通スベキニ非トテ男鹿
二ツ射留メテ女鹿ヲハ射デゾ通シケ
ル越中ノ前司是ヲ見テ詮ナイ黨
原ノ鹿ノ射様哉只今ノ矢一筋デハ
敵十人ヲバ防カンズル物ヲ罪作リニ矢

損ナニトゾ制シケル。大将軍九郎御
曹司義經。上ノ山ヨリ。平家ノ城郭遥
ニ直下テ坐ケルガ。馬氏落イテ見ントテ。少
少落サレケリ。或ハ西復テ落ルモ有リ。或ハ
中ニテ足折折テ死ヌルモ有。尓氏其中
ニ鞍置馬三匹。相遠ナリ落着テ。越中

ノ前司カ屋形ノ前ニ。身慓シテゾ立タリケル。御
曹司是ヲ見給テ。馬ハ主々ガ心得テ落サンニ
ハヨモ損ズマジカリケルゾ。尓ハ落セ義經ヲ標
準ニセヨトテ。先三十騎計。真先キ蒐テ落サレ
ケレバ。三十余騎ノ兵氏。皆続イテ落ス。小
石交リノ砂ナレバ。流レ落シニ二町計リ。颯ト。

落イテ壇有所ニ扣エタリ其ヨリ先キラ見下
ダセハ大盤石ノ苔蘚タルガ釣瓶下シニ十四
五丈ゾ下ッタル其ヨリ先ヘハ進ムベシ共覚エ
ズ又後ロヘ取テ返ベキ様モ無リシカバ兵
庇爰ゾ最後ト申テ忙然テ扣タル所ニ爰
ニ相摸ノ国ノ住人三浦ノ佐原ノ十郎義

連進出テ我等ガ方デハ鳥一ツ起テダニ朝夕
尓様ノ所ヲバ馳行ケ是ハ三浦ノ方ノ馬場
ヨトテ真先キ蒐テ落シケレハ大勢皆続
イテ落ス後陣ニ落ス者ノ鐙ノ鼻ハ先陣
ガ鎧甲トニ障ル程也餘リノ欝サニ目ヲ閉
デゾ落シケル工イ〳〵声ヲ忍ニシテ馬ニ力ヲ付

テ落ズ大形人ノ所為共見エズ。唯鬼神
ノ所為トゾミエシ落シモ果ズ関ヲ吐トゾ
作リケル。三千余騎ガ声ナレ𪜈。山魅答テ。
十萬余騎トゾ聞エシ。村上ノ判官代康
国ガ手ヨリ火ヲ出ヒテ。平家ノ屋形假屋ヲ。
片時ノ烟ト焼拂ズ。黒煙リ既ニ押掛ケレ

ハ。若ヤ助カルトゾ前ヘナル海ヘ多ウゾ走入ケ
ル。渚ニハ助ケ舟共多カリケレ共。舩丁艘
ニハ鐙フタル者ノ。四五百人千人計込乗
ラフニ。何カハ好ルヘキ。渚ヨリ三町計漕出ヒ
テ。目ノ前ニテ大舩三艘沉ニケリ。其後ハ
好武者ヲハ乗スル共。雑人バラヲハ乗ス

ベカラズトテ太刀長刀ノ鋒ニテ打拂ヒ
々々ケリ斯スル事トハ知リナガラ敵ニ逢
フテハ死ナズシテ乗セジトスル船ニ取付
舸付或ハ肘打落サレ或ハ臂打斬ヒテ
十ノ谷ノ汀ニ朱ニ成テソ列臥タル茶程ニ
大手ニモ演ノ手ニモ武蔵相模ノ岩黨
面テモ振ラズ命モ惜マズ爰ヲ最後ト
攻戦フ能登殿ハ度々ノ軍ニ一度モ
不覚シ給ハヌ人ノ今度ハ如何思ハレ
ケン薄墨ト云馬ニ打乗テ西ヲ指テ
ゾ落給フ播磨ノ高砂ヨリ御舟ニ
召テ讃岐ノ屋島ヘ渡給ヒヌ

# 盛後最後

口説

新中納言知盛の卿は生田の森は大将軍にて
生ち者は其日は紫宸にて亦此の帰ひ来る
緋威の鎧着ゐ連銭駵毛なるに金覆輪は
鞍をて亜くゐ糸にて結ひすりけるが東に向ッ我ひ給ひ
所に寄りて上の傍より寄せ給ひ明ん重慶使者を

九

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

立て。君々一年武蔵の国司にてまし給ひ間。
児玉の者どもが中よりも作。末御後をバ御後
ぜらるゝ作りぬ屋しんぞ送りて宇宙を拾ひ。御登
のはこれ人々後をかゝる事なれバ宇宙を黒
煙にて押蒐せり。河わや西山のもが船場をハ
こゝ立ち出我を通りし。我先へ我先へと我落行

者ゆゑ。越中の前司盛俊ゝ山の此侍大将にて
通りゆゑ今ハ落ツ去叶ツしこそ思ひ無ぎ人多
敵を待ちまゝ。嘗ハ武蔵の出此住人猪俣の
小平六則綱。好敵と目をかゝ。敵登場を合せる
駿馬ゆゑ越中の前司ゝ押並べて寄こ組ぬ
磽ど落ツ猪俣ハ八ヶ国ゝ此の人ゝ平る大力也。尓バ

鹿角の一二の草刈を様もなく一ら裂ゆかと我
笑へし越中此前もしも人目まれ二三十人が
刀業殿にと云へらし内に云七十人にて
上下にて船を云一人して推上推下に程の
縫者なりさらに猪渓を取て押て働き手
猪渓下に卧しながら物を謂ふ事也

餘りに強く推して声も出ず刀を捨ふ事
も云。猪の渓幅かつて刀の柄振るに及ず。
猪渓は刀にて劣ッ事に云。心は剣也
暫く息を續る抑らう矢の敵此首を
取るをいふ我も名渇る関也敵も名渇
せる取たまはず我大切なれ若も知ら頸

捕て何うせんと云ひれば盛俊実もこと思ひ寄。
本ハ平家の一門ずりしが才不肖なるに依て。
當時は侍る成されずり越中の前司盛俊
と云ひしかしり和君(キミ)は何者ぞ名のもとのふ
ご云ひしれば武蔵の国に住人猪俣の小平太
則綱と名謂る。清(ツラヽ)當世の体と見ゆ源氏の

方はいなく強く平家の御方ハ負多くまゐん
たれ給ひ作。哀同しきは則綱か命を助ひたれ
どいつし侍せ。たゞたゞも作りて生捕の因に御辺
一門何十人も坐(ヲ)せる。今度の勲功の賞る
ま替て御命をかりをハ助ひまゐんと云ひれば。
盛(下)俊身不肖なれ共流石平家の一門なり。

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

盛後源氏を憑ども思もよらず源氏又盛
後に頼れ来て已思給ひ今ぞ憎君が戸ゆ
哉ぐらで已に首を掻んとし事ゆれば正なう
作降人の頭掻ゆ様にいふこと云ゆれば
肥んとゆ赦しけれ前に堅田の畠の様に
乾上つ守ゆが後に水田の辺深かりける

膝の上に二人からの腰に無て見継に
守るゆゆまゆに音に聞ゆ威の道異なる
鞍毛なる事乗守る民者一斉盛後に
目を掛て歩せ寄る越中の前司恠気に
見ゆれば何もしに拵渓に親し作人見の西郎
て作が則縦がいりをしんゆ道で来ると覚へ

組たりとも組ましとも云ふが近付程
かしこ、ばしやしんぜんば落合ぬ事あらじと
思ひつゝ待居たる所に、交(アワヒ)一段(メ)計(リ)
駈来るが、越中の前司初は両人(リ)の敵を一目づつ
見けるが、次第に近付敵を端(ハタ)と守つて目、猪俣
をば見ず。猪俣力足を踏(フミ)て立上り、拳

を握り、〔越中の前司が〕胸板をはたと跳(ハ)ね返し、後(ウシロ)の水田へ。
仰(ノケ)けに突(ツキ)倒(タフ)す。起上らんとする所を猪俣上に
乗掛て、越中の前司が腰の刀を抜(ヌキ)、鎧の草
摺引上て、柄も拳も通(トヲ)れ通れと三刀刺(サイ)て
頸(クビ)を取る。去程に人見の四郎も落来り、か様の
時は論ずる事もありと思ひ、頸をば首とて太刀の

鋒(サキ)に黄(キ)なり揚る事大音声を揚る此日朱
日本国に鬼神を学ぶる越中の前司盛
後をバ民蔵の国の住(中中)人猪俣乃小平六
則綱が討(アフ)ずらぞ也と名謁る事其日此高名
の一(スロ)の筆(ヒツ)下(ヒ)ま我(ヒ)付(四)にけ(兆)ば(入)

忠度最後　九

口読
入国様に薩摩の守忠度は西の日此人将
軍まで望しけ海が雲日此紫末まで旗此の
沖の垂雲に黒京威の渡さんを灑きるの
姫をふたら海し紅水浴(イツ)無(ケ)此の鞍を乗て家
ひ(なり)ひ(なり)ぬ敵が其勢百騎斗(リ)が中小村圍まし為

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

口説

# 重衡生捕

九

付三位の中将重衡の口ハ生田の森の副将軍
にてをはしけるが其日の装束まで褐に白う
黄なる糸をとゞる。黒ハ村ハ中ゆ縫ゆる雲ゆ
紫ゆ濃の縫ゆ。童子駒毛と云聞ゆる花
ゆる猪ゆ乳ゆ子の後ゆ兵衛盛長ゆ。

滋目の雲金ゆ。緋威の縫着ゆ。三位の中将ゆ。
ゆしも秘蔵せられる。袖目無駆毛と云ゆる。
来ら小ゆ。主従二所打連。肋母ゆのゆ。
下の方、落ゆ行ふ前ゆ。落ゆ花の四郎高家。
椎糸深ゆ景雪鞍鐙を合る。追蔓ゆ渚ゆ
肋母ゆも参ゆ。ゆもゆ。落ゆ敵ハ追蔓

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

敦盛最後

ノトキ

去程ニ一谷ノ軍破レニシカバ武藏國ノ
住人熊谷次郎ナヲザネハ平家ノ公達
ノ千人多ケ船ニ乗ントテ三キワノ方アヤサ落
住キ給デン天晴ヨイ敵ニ逢テ組バヤト思ヒ
渚ヲサシテ歩ミ大ル処ニ宮ニ子リスキニ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

霞縫タルヒタレメ前黄ニヲイノ鎧キテ
ノワガタウツタル兜ノ緒ヲシメ金ヅクリノ太
カラハキ廿四サイタルキリワノ矢ヲヒ童蓀
ノ弓持テレン然アンゲナル馬ニ金ブクリンノ
クラヲヲイテノリタニヒタリケル武者一

騎海ヱザツトウチ入レ沖ナル船ニ目ヲカケテ
五六タン計ゾヲヨガセラル然ニ谷アレワ如何ニ
ヨキ大将軍トコソ見ヘ泰ラセテ催ヘニサ今
モ敵ニウシロヲ見セサセ給フモノカナガアサセ給ヒ
人々ト前ヲアゲテ二ヲ高キケレバ招カレニ

取テ返シ諸ニウチ上ラントシ給フ所ニ
熊谷波ヲキワニテゾラシ並ベムズトリンデ
ボウド落取テヲサヱテ首ヲカヽントテ
ウチカブトヲヲシ仰ノケテ見ケレハ美ノ
齢ハ十六カ七カノ天上人ノ薄化粧シテカ子

グロナリ我子ノ小次郎カ齢ニテ容顔寔ニ
美麗也ナレハ何クニカヲ可立不覚熊谷
イカナル人ニテ渡テセ給フソ名謁セ給ヘ助ケ進
テセント申ケレハ斯云汝者何者ソ名謁聞
アド宣ヘハ物ナラ拘ニテハ候ハ子氏武蔵国

ノ住人熊谷ノ次郎ハ真実ト名ノリ申ス。偖ハ
汝ニ逢テハ名乗マシイヅ不名謁トモ頸ヲ
取テ人ニ問ヘ見知ラブズルゾトゾ宣ケル熊谷
哀大将軍々此人一人討奉タリ氏可負
軍ニ勝事ワヨモ非ジ又助奉タリ氏勝ハ
ノノノノ
負ルもよハもいらじ我子ノ小次郎ガ今朝
一谷ニテ落チ負ヲ申タニモ真実ハ心苦ク
覚ルに被討給ひ此の給ひくば此度の父
だエソワ親に悲るんなれすらめぬるにて
肥進ラセントテ後の顧るんなれバ老妃

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

口読

漢軍

門脇殿の来子、義人の左更業盛八常

陸の国の住人、土屋の五郎重行組で

九

討ち給ひぬ。皇后宮の亮経正ゝ武蔵の

国の住人、河越の小太郎重房が手に懸て。

遂に討れ給ひ候。若狭の守経俊、淡路の

守清房、尾張の馬清定、三騎大勢の中へ

蒐入、散々に戦ひ、手に手に組、一所で討死

し給ひ候。彰中納言知盛の御子、生田の森の

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

中に隔て押並べてむずと組んでどうと落ち
取て押へて頸を掻き立上らんとし給ふ所に
敵が童落合うて武蔵の守の頸をとる。
監物太郎落重って敵が童をも討てげり（走三重ニモ三ツ之ル）
其後矢種の有る程射尽して打物
抜て戦ひけるが敵あまた討取弓手の膝口を
射させて立もあがらで居ながら討死してんげり
此紛れに新中納言知盛の卿は究竟の名馬
には乗り給へり海の面二十余町
およがせて大臣殿の御船に着給ふ
船には人多く取乗て馬立べき様も
なかりければ汀へ追返す阿波の民部

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

口説

## 落足

小松殿ノ末子備中ノ守師盛ハ主ノ
従七人小舟ニ乗リ渚ヲ棹テ漕出シ給
フ所ニ爰ニ新中納言知盛ノ卿ノ侍ニ
清右衛門尉公長ト云者アリ鞭鐙
ヲ合セテ馳来リ那ハイカニ備中ノ守殿

ノ御舟トコソ見進ラセテ作ヘ參リ
作ント申ケレハ船ヲ諸ヘ指寄セラル大
ノ男ノ鎧ヒ著ナカラ馬ヨリ舟ヘ岸波ト
飛乘ラフニ何カハ好カルヘキ舟ハ少サシ轉
ト蹈返シテゲリ備中守浮ヌ沉ミヌシ給
フ所ニ爰ニ畠山ガ郎等本田ノ次郎主

従十四五人殿馳ニ馳来リ先ツ備中ノ守
ヲ態手ニ懸テ引上奉リ遂ニ御頸ヲ
ゾ給ツテゲル生年十四歳トソ聞エシ
越前ノ三位通盛ノ卿ハ山ノ手ノ大将
軍ニテ坐シケルガ其日ノ裝束ニハ赤地
ノ錦ノ直垂ニ唐綾威ノ鎧著テ連

銭駢毛ナル馬ニ金覆輪ノ鞍ヲ置
テ来給ヒタリケルガ大ニ勢カニ押阻ラレテ
勇猛登殿ニモ後レ給ヌ痛手負テ静
ナル所ニテ自害セントテ東ニ向テ落行
給フ所ニ爰ニ近辺ノ国ノ住人佐々木ノ
木村ノ三郎成綱武蔵ノ国ノ住人

玉ノ井ノ四郎資景彼是七騎ガ中ニ取
篭進セテ終ニ其ニテ討奉テケリ其時
ニテモ侍一人付奉タリケリ中ニ
ノ時ハ落合ハズ凡東西ノ城戸ノ時
ヲ移ス比ニモ成ニカハ源平救ヲ盡ヒテ
討レニケリ檜ノ前ノ逆木ノ下ノ人馬ノ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

脾腺。山ノ如シ。一ノ谷ノ小篠原。緑ノ色ヲ。
引替ヘテ。薄紅ニゾ。成ニケル。一ノ谷。生田ノ
森。山ノ岨。海ノ汀ニ。射ラレ斬ラレテ。死又
ルハ知ラス。源氏ノ方ニ。斬懸ラルヽ。平家ノ
頸共。二千。余人也。今度一ノ谷ニテ。討レ
給ヘル平家ノ方ノ宗徒ノ人々ニハ。先越

前ノ三位通盛ノ卿。藏人ノ大夫業盛。
武藏守知章。備中ノ守師盛。薩
摩ノ守忠度。淡路守清房尾張守
清定。皇后宮ノ亮經正。弟若狹守
經俊。其弟大夫敦盛。以上十人トゾ聞
エシ。然ルヲ軍破レニシカハ。主上ヲ始メ進ラ

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

セテ人々皆御舟ニ召テ出サセ給フコソ
悲シケレ潮ニ引レ風ニ随テ紀伊路ヘ趣
ク舟モ有リ芦屋ノ沖ニ漕出テ波ニ淘
舟モアリ或ハ須磨ヨリ明石ノ浦傳ヒ泊
リ定メヌ楫枕ノ敷袖モ絞ツヽ臆ニ見
ユル春ノ月心ヲ摧ヌ人ゾナキ或ハ淡路

ノ瀬戸ヲ押渡リ絵嶋ガ磯ニ漾ヘハ波
路遥ニ霞渡リ友迷ハセル小夜衛是モ
我身ノ類哉行ク前未タ何ク所思定メヌ
カト覚シクテ一ノ谷ノ沖ニ徘徊舟モ有ケ
様ニ浦々嶋々ニ漂ヘバ互ニ死生モ知ガタ
シ国ヲ従フル事モ十四ケ国ノ勢ノ付事モ

十万余騎。都へ近事モ。終カニ一日ノ道
ナレバ。今度ハ尓共ト。頼モシウコソ。思ハレ
ツルニ。一ノ谷ラモ。責落サレテ。最ド心細フ
ゾ成ラレケル

口説

小宰相

越前の三位通盛の卿の侍に。官田滝口
時貞ヒ云者もて。急北の方の御舟に来て
中にあるハ。君々今朝湊河の下にて。敵七
騎が中に取籠らしさ。其給て。終に討れ
さ。其給ひ。惟ひ忠。中にも殊に多く下て

討なりしハ近江の国の住人作家
の木村の三郎成綱武蔵の国の住人
玉井の四郎資景ここへ若謁来せて
進ひしか時負も一所て討死仕御最
後の御供とも仕候ふ作ふ芸薬て
よりも作進ひしは通盛ぬ御ぬ云ことも

汝ハ命を捨べしすぬ何ぬとしてなるらん
て御行来とも尋来せよこと仰せ作し
程に甲斐なき命なからへて法もなう
こゝ是を遁れ参て作へこゝ申はしハ北の方
ゆゑも敢給ハ事引被て御所ぞ一定
討も強ことも聞給ことも若僻事ぬ

もしやいきて帰らるゝと二三日は白地に出る人を待心地して待つるに四五日も過しかばもしやの頼も弱果ていとゞ心細て成しける只一人つき奉りける乳母の女房も同枕に臥沈にけり斬と聞えし七日の日の暮

暮ほどより十三日の夜までは起も上り給はず明れば十四日一の谷より屋島へ漕着んとての宵打過るまで臥給ひたりしが更行ほどに舟の中も静まりしかば北の方乳母の女房に宣ひけるは今朝まで三位討れぬと聞えしかども実とも思はで有つるが

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』 請求記号 860-44
ガラス使用

此事ばかりぞ実在もあらんと思定て
有けるは其故は皆人毎に湊河の那
らんずる三位討れぬとは云しかども
其後生て逢たりと云者一人もなし明日
打出んとての夜白地所にて行逢たりしか
ば何よりも心細げに打歎て明日の

軍には通盛必討れんずるにこそ我如何
にも成なん後人はいかがし給ふべき
なんど云しかども軍はいつもの事なれば一定
さ有べしとも思はで有し事こそ悲
しけれそれを限とだにし思はまし
かば何ど後の世と契らざりけんと思ふさへ悲しく

こゝ我悔しゆれたゞならず成事る事
と也日来ゝ隠して謂ぞ事けるが餘に
心深ふ思ひもしらて云出したりしかバ
斜にして娘氣なて通登三十ゝ成を
子ゝ云者のなり事ゝ表同ハ男子
まてもあしゝ浮世の志がたみまゝ思並

計也備幾月程に成やらん心地ハ何を
發らず何ゝなく波の上船の中に住居
なれハ閑に身々ゝ成て後人ハ如何ハ
云ふべきなぞ云しハとかなかなける
菓書哉誠やらん女々左様の時十ゝ
九ハ必死思ふなれハ愧がましく紀目我

見る物空に成ても心変し、静に身をここ
成て後は、昔を育て、無人の俤にも
人りやうらむ思ひとも甚しく復らん度毎に、
昔の人耳恋しくて、思の数まさり
ことも忘るゝ事なく、是非しらぬ道に遁る
ましれど道いらるとも若此世を恐び過て

いし足をは何とせ世の習と思ひ外れ不思
それを思へば心愛しはまた法文は
勤ぬ事なれば沖に立ずやうる。一ゆ色を前に
人を恋しまじい身より、水の底へも
入りやらぬ思定めも有我しとよ、足下に大
留つ歎き有する事も我心若しぬれども
甚く生りけれバ歎きいりくらも過さんず

見るゝ宜う成ぬ心愛し靜に身々こ
成て後少そゝ者を育て無人の信にも
人びやこゝ思へこゝも甚る成ん度毎に
八首の人耳意しくて思ひ数々増
こゝも志るし事ならずも非じ終にゝ遁る
ましれ道ならず若此世を忍び過せ

こゝも心に任せぬ世の習ひ思ひ外れ不思
議もあれ我ことよ生て居る命に
人を意しこゝ心り今より水の底へも
入びやこゝ思定る有我ことよ足下に人
留ゝ歌り今する事ハ我心苦しあれとも
甚ハ生所なれバ歌ならも過さん事

「説」童が紫木の何るをバ取てバかなら無
僧あもすりこそ人の御菩提成も弔ひ
無しせ童が後生をも助給へ書置たる
丈ごもとは都へ傳へ給へなどゞ細さと
宣へバ乳母の女房涙を押へ幼子をも
振捨花すり親戚も留置遥々ことを

附参らせ給ふ志をバいか計ぞ思ひ
見ぬ傳ふらせ四説今度一の谷まで討れさうせ
給へる御一門の北の方此御跡ごと何れか
おろそかなる涙せ給ひ侍ひ閑に身
身ぞ成せ給へ後少何なら無常の
狭りあてもとそ給人を育ふらせ

御様を替て佛の御名をも唱へてなき人
の御菩提をも弔ひ参らせ給へかし
必一ッ蓮ハチスへと思召れ候とも生替ら
せ給はん後六道四生の間にて何れの
道へか趣かせ給はんずらん行逢せ給はん
事も不定なれば御身を投ても由なき

御事也其上都の御事をバ誰見續
参らせよとて加様にハ仰られ
侍やらんと申ければ北の方此事悪う
も聞れぬとや思はれけん心に余ッ
ても推量給ふ也大方の世の恨めし
さにも人の別れの悲しさにも身を投んなど

ご云々常の習ヒ、そもとも亘雖ミ様也
かしこたゞ思立事にはあらぬ足下に
知らせしてそ亘海しぬぞ今ハ夜も
更ぬ誘や寝子ゆゑ宣へハ乳母の女房
此四五日々湯水をだまもてかゞしたり
御覧し入させ給ハ忠人のケ様に

細々ゝ御ら亘ハ実思ハ立事も也
悲りて寔にそれ程も思ハ立事なら
ば童とも千尋の底とも引て其具也
さしせ給ふ頃りれ給れ来せなき後片時
も離も参らせしも覚へ忠者をなぎ
もして御湯に在らがら些ト打まゝ給み

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

たりける時に北方やから舷に起出給ふ。
漫々たる海上にはバ何地に西とは知
称ども月の入され山の端をも其方の空
まや覚しかなく聞に念佛しなくて
沖の白洲に鳴千鳥天の戸渡る櫂の音。
打かたらに哀なる勝事かなく忍声に念仏

百返計唱へさせ給ひつゝ南無西方極
樂世界の教主弥陀如来本願誤たせ
給ひ給て別もし妹背れ中らひ
必一ツ蓮にこそ浴々遥に捨詢南無
唱る声そこに海すぞ渡る給ひ事
説明もハ十四日一の谷より屋島へ押渡る

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

こその夜生計りの事也あれハ舟の中
静て人これを祝さるけり中もかん
ぶるの一人寝ざるけるが此由我人来ら
せるゝ何もハいるまあの御舟より女房の
海へ入らせ給ひぬるハと呼ツ寄りあれハ
乳母の女房打驚胸打噪きて流様さふ

傍我探も芸ゆゑさらしかハ唯那ゆ那
よこそあれあるゝ人数多下りて取揚
なら母こゝ志あれ芸さらしたる春の夜ゆ
聞ひる美むゆ物ともバ四方の村雲うかれ
来てかづあ見しく月種あて人給
ハ手遥る程経て後夜上生ッたるけれ芸

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44
ガラス使用

早此世にあるべし人に成給ひ也。白袴に
練貫の二ツ衣を着給ひ、髪も袴も
彼行く所とりし其かねぞ乳母の
女房もしらぬ顔を押當て
寔に是程と思ひ立夏なりしハ童をも
千尋の底をも引こそ具せさせ給ふ

屋さに恨めしうも唯一人留させ給ふ
者哉さ御ましても今一度物御らもし
続ひて童に聞させ給へるゆ悶へ焦れ
給ひ此世にはなし人と成給ひぬる上
一言の返事なりしも後給ひ終に通ぬる
息も早終果ぬ云程に春の夜の月も

雲井る頃にて霞める空もいと心行バ若紫を
尽せず思へども捉しも有べき事ならず
袖バ浮ちや上り給ふと故三位殿の著背
の十領袖ずりゆるに引纏まりぬ終に
海にて沉ける乳母の女房も今度は
後もしに續て海へ入ませしけるを

人々取留けもバ力及ず餘りに若紫
れせん方なくにやすぼから髪をえ
さみ下し中納言の律師忠快に剃
も年ゆ泣々戒を持て主の後世我
扉ひりる昔より男に後る類多しと
いざ也様我始ふるに常の習ひ身我

投るとしたれども、かぞへ様也。忠信は二君
に仕つす。貞女は二夫に見すことを、ケ様の
事をやかべくに、抑此女房にかしは頭の
刑部卿憲方の娘、上西門院の衆
宮中一の美人、名をは小宰相の局ぞ
かゝる此女房十六にて申しうけて安元の

春の比女院法勝寺へ花見の御幸ありし
に通盛の卿、其時はいまだ中宮の亮
にて供奉せられたりけるが此女房を
一目みて哀に思初しより此方始は
歌を詠て文をは盡されしかゝ玉章の数
取積て取入給ふ事もなし斯て三年

こゝに通盛の卿今は限りの文を書
て小宰相殿の許へ遣さるゝ折節取伝ける
女房にだにも逢ずして使空しく帰りける
せにこそありけるが折節小宰相殿は里より
御所へぞ参られける道にて行逢たり
使空しう帰り参らん事の本意なさに

傍をつと走り通る様にて小宰相殿の
車の簾の中へ通盛の卿の文を投げ
入れける供の者共に問給へば知らずと
申すなりされば其文を開けて見給へば
通盛の卿の文なりけり車に置くべき様も
なし大路へ捨んも流石にて袴の腰

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

す餘りよ人の心強さも今ハ中々嬉敷
昔とにかく細々と書て奥ニハ一首の
歌ぞ有ける 我恋ハ細谷川のまろき
橋ふみ返されてぬるゝ袖かな 女院是ハ
逢ぬを恨たる文よ 餘りよ人の心強さ
も中々怨と成る物を 中比
小野の小町とてみめ貌世ニ勝れ情の
道ありがたかりしかバ見る人聞者肝
魂を痛ましめずと云事なし 去ども
心強き名をや取たりけん終ニハ人の
思の積りとて風を防ぐ便りもなく雨
漏さぬ業もなし 宿ニ曇らぬ月星を

洞る浮べ野辺の若菜澤の根芹を摘
てこ我も露の命ぞ我バ過しけれ為様にも
若しも返るすべき事ぞかしとて黍
くも女院御覧ありあり自返事遊
ばひて我もきれもある上歌 若和め細谷川の
凡本橋ゆみ返してもも落ぎしらめやハ

三重 胸の間の思ひ留士れ煙と顕もし神の上れ
流しも清見が関の波ゆれや眉目ハ業れ
花ゆれバ三位此女房ゆ賜て丘の志浅
かしすきれバ西海の波の上船れ中をも引
具して終る一ツ道へ我も赴かれ為る玄様に
門脇の平中納言敬盛の卿も嫡子越前

860
44

十三之巻
判官都落
吉田大納言
六代
泊瀬六代詣
六代被斬

国立国会図書館　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『前田流節附平家物語』　請求記号 860-44

ガラス使用